

## 『新古今』歌（一二三三三番）「面影とめよ」について

佐藤茂樹

『水無瀬恋十五首歌合』は、「月に面影がかすんで見え、その月が涙に宿る」という、『新古今』的妖艶な歌が詠出された歌合であった。俊成卿女の「おもかげのかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に」である。また、同歌合には、「涙に面影が宿る」と着想されたと思われる歌も詠じられている。涙に月が宿るという常套的な発想を超える発想である。俊成卿女の影響の有無は不明であるが、斬新な着想の歌であり、『新古今集』（恋・一三三三 雅経）にも採られている。この小論では、この着想について、検討を試みることにする。

### 一

五十二番 関路恋

左 持

家隆

わすらるるうき名もすすぎきよみがた関のうへこす浪の月かけ

右

雅経

みし人の面影とめよ清みがた袖にせきもる浪のかよひぢ

左右の清見潟ともよろしきやうに侍るを、左、うき名もす、げやいかにぞきこえ侍るを、なみのかよひぢはすこしまさるべくやとみえ侍れど、持とつけ侍りにけり

右歌の「面影とめよ」の「面影」がどこに留まるのかについて考えたい。石田吉貞氏は『「袖に流れる涙の通り路で、丁度清見潟の関の様に、番をして」ある関所よ。どうか、以前逢った懐かしい人の面影をとどめて、私に見せてくれよ』袖に涙の留まっている所を関所と見、かつての恋人の面影をうつして見せよという意である（1）」と考察された。涙に面影を留めると考えておられる。

窪田空穂氏は「せめて、面影だけでも留めよの意で、なつかしい面影の、浮かぶと間もなく消えるのを惜しむ心でいっている」と語釈され、「以前逢ってそれきりになっている人の面影を、袖の涙にとどめてくれよ、清見潟よ。袖に関を設けて守っている、ここの波のごときわが涙の通り路よ」と口語訳されている。また、「一たび逢っただけの人の面影を、袖の涙に映して留めたいという心を、旅泊としての清見潟で起こしたものとて詠んである。実際に即した形とはいえる。恋と自然とを一つにしようとして、詞花集の歌を典拠として技巧をつくしたものである。複雑と余情を求めているところは、態度としてはまさに当時のものである（2）」と評釈されている。『詞花集』とは「むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみもたたぬひぞなき」（恋・二二三 平祐拳）のことである。『詞花集』歌の「清見が関」の「なみたつ」場所を捉え「なみだ」と関連づける発想が雅経歌には窺える。ただ、「関路恋」という題を得て、雅経歌は「清見関」ではなく、「清見潟」と詠じ、「袖」「せきもる浪」と詠じている点、俊頼歌「さらぬだにかはらぬ袖をきよみがたしばしなかけそ波のせきもり」（『散木奇歌集』雑・一四五七）の影響も考えられる。ただ、このことよりも重要なことは、「人の面影を、袖の涙に映して留め」という理解をされているということである。

久保田淳氏は、「恋人として逢った人の面影がこの波路を通り過ぎるのをとどめておくれ、清見潟の関守よ。袖で堰いても涙が漏れ、面影もとどまってくれないので…」と口語訳され、「清見関に旅寝して恋しい人を夢に見、それをいつまでも見続けていたいと願う旅人の心を歌った歌である（3）」と解釈されている。袖から流れ出る涙を留めよと考えておられる点に、一首の解釈の違いが認められるが、涙に面影が宿ると考えておられる点は同じである（4）。俊成卿女歌は、「おもかげのかすめる月ぞやどりける」袖の涙」と、直接的に「面影のかすむ月が涙に宿る」と詠じているが、雅経歌は直接的に「面影涙に宿る」とは詠じていない。「面影涙に宿る」とは、「面影を留めよ」と言い、「袖に」浪のかよひち」（袖には涙の通路）という二句の関係を合理的に判断することから得られた、考えであつたと思われる。

## 二

「面影」は『万葉集』において、十四首詠まれている。その例歌は次のように分類できる。

## 一、「面影」を「見ゆ」と詠む

- ① 「みちのくのまのかやはらとほけどもおもかげにしてみゆといふものを」  
（巻三・三九九 笠郎女）  
② 「よのほろわがいでてくればわざもこがおもへりしくしおもかげにみゆ」  
（巻四・七五七 大伴宿祢家持）  
③ 「たかまどののかほばなおもかげにみえつついもはわすれかねつも」  
（巻八・一六三四 大伴宿祢家持）  
④ 「しきたへのころもでかれてわをまつとあるらむこらはおもかげに見ゆ」  
（巻十一・二六一二）  
⑤ 「さどほみこひわびにけりまそかがみおもかげさらずいめにみえこそ」  
（巻十一・二六四二）  
⑥ 「としびのかげにかがまふうつせみのいもがゑまひしおもかげにみゆ」  
（巻十一・二六五〇）  
⑦ 「とほくあればすがたはみえずつねのごといもがゑまひはおもかげにして」  
（巻十二・三一五一）  
⑧ 「としもへずかへりこなむとあさかげにまつらむいもしおもかげに見ゆ」  
（巻十二・三一五二）  
⑨ 「わたつみの かみのみことの みくしげに おほぶねの ゆくらゆくらに おもかげに もとなみえつつ」  
（巻十九・四二四四 大伴氏坂上郎女）

## 二、「面影」を「思ほゆ」と詠む

- ⑩ 「かくばかりおもかげにのみおもほえはいかにかもせむひとめしげくて」  
（巻四・七五五 大伴宿祢家持）  
⑪ 「いまつくるまだらのころもおもかげにわれにおもほゆいまだきねども」  
（巻七・一三〇〇 柿本朝臣人麿之歌集出）  
⑫ 「わざもこがゑまひまよびきおもかげにかかりてもとなおもほゆるかも」  
（巻十二・二九一二）

## 三、「面影」を「忘る」と詠む

- ⑬ 「たちかはりつきかさなりてあはねどもさねわすらえずおもかげにして」  
（巻九・一七九八 田辺福麻呂之歌集出）

## 四、省略

⑭「ゆふさればものおもひまさるみしひとのこととふすがたおもかげにして」

(巻四・六〇五)

以上のように、『万葉集』においては、「面影」は目に見えるものとして多く詠まれている。また、心に思われるもの、心や目に忘れられないものとして詠じられている。⑦歌は、直接「見ゆ」とは詠じていないが、「すがたは見えず」「おもかげにして(見ゆ)」という対照化と考えられる。省略とした⑭歌も、夕暮れ時に物思いがまさり、一度逢った人の言問う姿が面影として浮かぶのであるから、「面影」を目にも見え、心に思っていると思われる。また、特徴的なことは、後世のように「面影立つ」「面影そふ」のように「面影」が名詞として独立した形で捉えられておらず、「面影に」(九首)「面影にして」(四首)として、表現されていることである。この点については、既に、村田理穂氏の指摘がある(5)。ともに「面影として」という意である。⑤歌のような「おもかげさらずいめにみえ」といった例はあるが、万葉時代においては、「面影」は「面影として」という決まり文句的な発想があったと思われる。

## 三

次に、八代集を見ると、三十四首あり、うち、十九首が『新古今』である。三代集と『後拾遺』の例歌をあげる。

- |                                    |                     |
|------------------------------------|---------------------|
| ①「夢にだに見ゆとは見えじあさなあさなわがおもかげにはづる身なれば」 | (『古今』恋・六八一 伊勢)      |
| ②「こし時とこひつつをればゆふぐれのおもかげにのみ見えわたるかな」  | (『古今』物名・一一〇三 つらゆき)  |
| ③「いつのまにちりはてぬらん桜花おもかげにのみ色を見せつつ」     | (『後撰』春・一三二 みつね)     |
| ④「玉かづら葛城山のもみぢばはおもかげにのみみえわたるかな」     | (『後撰』秋・三九一 つらゆき)    |
| ⑤「おも影をあひ見しかずになす時は心のみこそしづめられけれ」     | (『後撰』雑・一二〇八 伊勢)     |
| ⑥「おもかげにしばしば見ゆる君なれど恋しき事ぞ時ぞともなき」     | (『拾遺』物名・三九三 よみ人しらず) |
| ⑦「さかざらむ物とはなしにさくら花おもかげにのみまだき見ゆらん」   | (『拾遺』雑・一〇三六 みつね)    |
| ⑧「おもかげに色のみこのる桜花いく世の春をこひむとすらん」      | (『拾遺』哀傷・一二七五 平兼盛)   |
| ⑨「いかばかりうれしからましおもかげにみゆるばかりのあふよなりせば」 | (『後拾遺』恋・七三六 大納言忠家)  |

伊勢は、⑤歌において「おも影をあひ見しかずになす」と詠み、「面影」を独立した名詞として捉えている。そのことにより、結び付く用言は広がる。また、①『古今』歌では「おもかげにはづる身なれば」と詠み、『万葉』歌同様、「面影に」と語形は同じであるが、「面影として」という意ではなく、「面影によって」といった意であり、その機能は違う。伊勢は、二首だけの例であるが、「面影」を「面影に」「面影にして」として、捉えることなく、普通の名詞として認識していたことが分かる。ただ、①『古今』歌は「おもかげにはづる身」といい、鏡に映るわが面影をみて引け目を感じ、⑤『拾遺』歌は「みしかずになす」というのであるから、伊勢にあっても「面影」は見るものとして捉えられている。その他の三代集、『後拾遺』の歌人達は、「面影に」として詠じており、『万葉集』の一種決まり文句的な用法を踏襲していたと言える。

この時期の私家集においても次の様に、「面影に」として詠まれている。

- ①「わかるともおもほえぬかなわすらるときしなればおもかげにみつ」  
 ②「あとたえてこひしきときのつれづれは面影にこそはなれざりけれ」  
 ③「いつしかとまつゆふぐれのおもかげにみえつつみえぬことのわびしき」  
 ④「いつのまにちりはてぬらむさくらばなおもかげにのみいまはみえつつ」  
 ⑤「かすがののなかのあさがほおもかげにみえつついまもわすれなくに」

その一方で、次のような歌も見える。

- ①「おもかげはみづにつけてもみえずやは心にのこりてこがれしものを」  
 ②「かけておもふ人もなければ夕されば面影たえぬ玉かづらかな」  
 ③「うちみえむ倂ごとに玉かづらながきかたみにおもふとぞおもふ」  
 ④「ゆめにだにつれなき人のおもかげをたのみもはてじこころくだくに」

これらは、「面影」を「面影」として捉え、「面影に」とした発想ではない。ただ、「面影」にかかる様態は依然として、①伊勢歌・③貫之歌のように「見る」である。②貫之歌も「面影たえず見ゆ」と考えられる（6）。「面影」の用法は「面影に」という形を取らなくとも、「見る」ものである。ただし、④忠岑歌「たのむ」に、新しい詠み方が見える。「面影に」とする固定化した発想から自由になることで、表現の可能性は広がったと言える。次にそうした例歌をあげる。

- ①「めかるともおもほえなくにわすらるる時しなればおもかげにたつ」  
 ②「さととほみこひわびにけりますかがみおもかげさらず夢にこそみめ」  
 ③「あづま路のさやのなかやましげくとも君きまさねばおもかげもせじ」  
 ④「月日こそあらぬそらななき人のおもかげのみぞかはらざりける」  
 ⑤「二葉にてみし面影もかはらぬに若なつみけるけふにあふかな」  
 ⑥「ほととぎすこひわびにけるますかがみおもかげさらにいまきみはこず」  
 ⑦「夢に見てあかずさめけむおもかげをうつつのちよになしみてしかな」  
 ⑧「おもかげはせきのしみづにうかぶれど身をしづめたるみなそこぞうき」  
 ⑨「はるかぜにゑみをひらく花の色はむかしの人のおもかげぞする」  
 ⑩「ほのみえしおぼる月夜のおもかげはあまのいはとのいつかあくべき」  
 ⑪「しらくものたえてしらじなわかれてはおもかげ山のたちゑこふとも」  
 ⑫「おもかげのわすれぬ人によそへつついるをぞつたふ秋の夜の月」

（『伊勢物語』第四六段・『古今和歌六帖』第四・二〇六一 なりひら）

（『古今和歌六帖』第五・三二二八 人丸）

（『古今和歌六帖』第六・四〇三〇 伊勢）

（『齋宮女御集』二五八）

（『元輔集』九六）

（『猿丸大夫集』一五）

（『兼澄集』一〇二）

（『大式高遠集』二二三）

（『大式高遠集』二八二）

（『肥後集』一六三）

（『肥後集』一八〇）

（『肥後集』二〇三）

（『新古今』（恋・一二六五）では「いるとぞしたふ」）



- ⑬ 「いつくしききみがおもかげあらはれてさだかにつぐるゆめをみせなむ」  
〔相模集〕三一四
- ⑭ 「夢にてもあかずさめけんおもかげをうつつの千世にならべましかば」  
〔輔親集〕一〇四
- ⑮ 「あまつ空とよの明にみし人の猶おもかげのしひて恋しき」  
〔公任集〕五四六
- ⑯ 「君は来て思ひやいでし月みればおもかげさへぞそふ心ちする」  
〔赤染衛門集〕一四八
- ⑰ 「ますかがみみえかくれる面影はこころのおにといづれまされり」  
〔能因法師集〕四七
- ⑱ 「面影のなほ忘れでみゆるかなまがきの鳥とむべもいひけり」  
〔能因法師集〕一四五
- ⑲ 「あまつ風ふけひのうらにあらねどもわがおもかげは浪ぞ立ちそふ」  
〔能因法師集〕二〇一
- ⑳ 「わかるれどあさかのぬまのこまなれば面影にこそはなれざりけれ」  
〔能因法師集〕二一〇
- ㉑ 「たちなみしおもかげごとのこひしきにすみうかれぬるやどのみづかな」  
〔出羽弁集〕六二
- ㉒ 「忍ぶれど面影山のおもかげはわが身をさらぬ心地のみして」  
〔夜の寝覚〕四 中納言
- ㉓ 「こひわたるゆふぐれがたのおもかげをたそがれどきといふにやあるらん」  
〔成尋阿闍梨母集〕五九
- ㉔ 「ゆめのうちにみしおもかげのかはらねばなほありしよの心ちこそずれ」  
〔弁乳母集〕九八
- ㉕ 「ますかがみかげはなるめる君なれど猶わすられずなれしおもかげ」  
〔弁乳母集〕一〇二
- ㉖ 「憂けれども見し面影の恋しきに今宵の月をあかず見るかな」  
〔榮花物語〕三二一 五節の君
- ㉗ 「おもかげは身にそひながらこひしさのなぐさまざりしあきのよひかな」  
〔郁芳門院安芸集〕三九
- ㉘ 「君こふるなみだに月はみえねどもおもかげのみぞたちもはなれぬ」  
〔俊忠集〕三三

「面影」について十六の詠まれ方が見える。複数あるのが、「面影恋し」(⑪⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、  
「慣れし」(⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)、  
「面影増す」(⑥)、  
「面影(千世に)なす」(⑦)、  
「面影浮かぶ」(⑧)、  
「面影飽く」(⑩)、  
「面影現はる」(⑬)、  
「面影並ぶ」(⑭)、  
「面影勝る」(⑰)、  
「面影慣れし」(⑲)の例がある。⑱「忘れでみゆ」や⑲「わすられずなれし」は、「忘る」に分類したが、「見ゆ」「慣る」としてもよい。厳密性に欠ける嫌いはあるが、多様な詠まれ方をしていいることは分かつと思う。

①歌の「立つ」は『業平集』では「面影にみゆ」となっているものではない。「面影」は恋しく、忘れることなく、飽きることなきものである。『万葉』以来の伝統である「(面影として) 見える」「(面影として) 思われる」以外に、どのような表現をされているのかを見ると、「あらはれ」(⑬)、「浮かび(水に)」(⑧)、「立つ」(①)のであるが、それらも、結局は「あらはれ」「浮かび」「立つ」のが見え、または思われたのである。そうしたなかで、「さらず」(②㉑)、「そふ」(⑬⑱㉒㉓)、「はなれず」(⑲㉔㉕)はそうした視覚的把握ではなく、「面影」が作者の身近にあるという親近感的感覚ではないだろうか(⑦)。こうした発想は、「面影に」として詠じられているが、「見る」ではなく、「はなれず」、「さらず」、「そふ」と詠じられている。「面影」を「見る」としてではない、表現の展開をみることができる。

また、㉑成尋阿闍梨母歌の詞書には、「なげきくらしたるゆふぐれ、つねよりもおもかげにおぼえ給へば」とある。歌は「おもかげを」と詠じているが、詞書では「おもかげにおぼえ」と記す。「おもかげおぼえ」ではない点に、通常の言語感覚では、「面影」は「面影に」(面影にして)として表現されるものであったと考えられる。

## 四

『金葉集』『千載集』の例歌を見る。

- ①「かがみやまうつろふはなを見てしよりおもかげにのみたたぬ日ぞなき」  
 （『金葉二』春・四五 大武長実）  
 ②「あすよりはよものやまべのあきざりのおもかげにのみたたむとすらむ」  
 （『金葉二』秋・二五四 中原経則）  
 ③「おもかげはかずならぬ身にこひられてくもゐの月をたれと見るらん」  
 （『金葉二』恋・三七一 藤原知房朝臣）  
 ④「いとどしくおもかげにたつこよひかな月をみよともちぎらざりしに」  
 （『金葉二』恋・四二四 内大臣）  
 ⑤「あかなくにちりぬる花のおもかげや風にしられぬさくらなるらん」  
 （『千載』春・九六 覚盛法師）  
 ⑥「あづまぢののじまがさきのはまかせに我がひもゆひしいもがかほのみおもかげにみゆ」  
 （『千載』雑・一一六六 左京大夫顕輔）

六例の内、四首が「面影に」と詠じられている。伝統的な詠み方である。ただ、「面影に見る」というのは、⑥『千載』歌だけである。「面影に立つ」とする例歌が三首ある。そのうち、②は「朝霧」との関連で「立つ」と詠まれているが、「見る」から「立つ」への志向がみられるように思う。

「面影」を「立つ」と詠じたのは、勅撰集では『金葉集』が初出であるが、和歌史の上では、「風さむみさえもさえずもやまざとはみやこの月ぞおもかげにたつ」（『郁芳門院安芸集』三五）である。「山里では都で見た月が面影に立つ」というのである。「面影に見ゆ」としても意は通じる。ここは月との縁語から「経つ」、さらに「立つ」と発想され、月日が経つように「月の面影が立つ」と構想された技巧的な表現であると思われる。『金葉』④歌も同様、「月」との関連からと思われる。①歌も「うつろふはな」に時の経過を見、時経ち、「面影立つ」と表現されたのである。こうした技巧的表現や、前節で見た「立ちそふ」(19)、「たちもはなれぬ」(27)の影響のもと、「面影立つ」は『散木奇歌集』に五首、『久安百首』に五首見られ、「面影立つ」が自然に詠じられていったと思われる。また、④金葉歌の詞書は「月増恋といへることをよめる」とあり、月と恋との結びつきは密接であり、「月」を見て、「面影」を見る発想も自然と言える。「面影」と「月」との関連が考えられる。

『新古今』成立まで、「面影」は多様な詠まれ方をする。『散木奇歌集』では次のようである。

- ①「君はさは月みてのみや思ひ出づるわがおもかげははなれぬものを」  
 （秋・五二八）  
 ②「いにしへのおもかげをさへさしそへて忍びがたくもすめる月かな」  
 （秋・五三二）  
 ③「恋しさにあはれむかしのおもかげをあまのかはせにやどしてぞみる」  
 （悲歎・八二）  
 ④「ことごといたつ面影は人しれずおつる涙のかどでなりけり」  
 （悲歎・八三四）  
 ⑤「かきたえしほどふる河のそこ見ればながれしみをぞおもかげにたつ」  
 （恋・一〇八一）  
 ⑥「せたの里橋の馬ふみくちめおほみそこの涙ぞおもかげにたつ」  
 （恋・一〇八八）  
 ⑦「としふれどこすのきけきのたえまより見えししなひはおもかげにたつ」  
 （恋・一一七五）  
 ⑧「つれなさを思ひあかしのうらみつあまのいさりにたくもの煙おもかげにたつ」  
 （雑・一五二四）

「面影」の詠じ方は、「面影に立つ」(④⑤⑥⑦⑧)が五例あることが際立つが、「おもかげはなれぬ」(①)、「おもかげをさしそへ」(②)は先行歌があり、「面影」は「見る」よりも、「身に添う、身から離れぬ」ものとして解される流れのあることが分かる。

「面影立つ」も斬新な言葉遣いであるが、「面影立つ」「面影ぞ立つ」ではなく、「面影に立つ」として表現している点は、伝統遵守の姿勢が見られる。「面影」を「涙」の「門出」と詠む発想(④)は注目に値する。

次に『久安百首』の例歌を見る。

- |   |                 |
|---|-----------------|
| ① 「をしみかね入りぬる夜半の月なれど猶おもかげはとどめおきけり」       | (四〇 御製)         |
| ② 「すみなれし宿の事のみ面影にあさたつ旅のくさまくらかな」          | (一九五 中納言右衛門督公能) |
| ③ 「東路の野しまがさきのはま風にわがひもゆひしいもがかほのみおもかげにみゆ」 | (三九六 左京大夫顕輔)    |
| ④ 「我が恋を寝ては夢に見覚めぬれば面影にたつあはぬまぞなき」         | (四七〇 前備後守季通朝臣)  |
| ⑤ 「おくりつる人のなげきやとまるらむ面かげにたつあさねがみかな」       | (五八〇 隆季朝臣)      |
| ⑥ 「袖ふかし過ぎがてなりしうつりがのけさまでにほふ面かげやなに」       | (六七七 尾張守親隆朝臣)   |
| ⑦ 「冬の夜の雪と月とをみるほどに花のときさへおもかげぞたつ」         | (八五八 丹後守顕広)     |
| ⑧ 「思ひわびみし面かげはさておきてこひせざりけん折ぞ恋しき」         | (八七五 丹後守顕広)     |
| ⑨ 「忘れにし人はなごりもみえねども面かげのみぞたちはなれぬ」         | (一〇七八 待賢門院堀河)   |

「面影立つ」という発想が広まっていることが分かる。ただ、「面影に立つ」(②④⑤)は三首あるが、「面影ぞ立つ」(⑦)「面影のみぞ立つ」(⑨)があり、「面影に」に囚われない新しい発想がある。①歌は、「月の面影を留め置く」という。留め置く場所については、明確に表現されてはいないが、この例歌にあっては、月の面影は心、脳裏、瞼にあると考えられる。月は入り、空にはないが、その面影はあるという、対照化が見られる。⑨歌に「面かげのみぞたちはなれぬ」があるが、このような親近感的感覚の例をあげる。

- |                                     |                         |
|-------------------------------------|-------------------------|
| ① 「故郷の花の盛は過ぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな」        | (『和歌一字抄』九〇一 経信卿)        |
| ② 「ますかがみみし面影の身にそひて心は君にうつりぬるかな」      | (『後葉集』恋・三二一 よみ人しらす)     |
| ③ 「夢にさへ見し面影の立ちそひてぬるよもやすむ心ちこそすれ」     | (『中宮亮重家朝臣家歌合』一一四・小侍従)   |
| ④ 「おもかげもたちそふらめや花の色に君がまそでのにほひかとみよ」   | (『出観集』雑・七七九 源俊重)        |
| ⑤ 「きみにこそ我がこころをとどめつれわれをはなれぬ君がおもかげ」   | (『重家集』後朝恋・一八五)          |
| ⑥ 「わすられぬおもかげをのみ身にそへて人のこころのうとくもあるかな」 | (『風情集』恋・二二二)            |
| ⑨ 「いかなればつれなき人のおもかげの我が身にそひてはなれざるらむ」  | (『風情集』恋・二八八)            |
| ⑩ 「おも影にとまるはかひもなかりけり梢にちらぬ紅葉ともがな」     | (『右大臣家歌合(治承三年)』二六 基輔朝臣) |
| ⑪ 「朝夕に面影さらぬ都かなこころやさきにたちかへるらむ」       | (『右大臣家歌合(治承三年)』四九 季経朝臣) |

- ⑫ 「とどめてし我が心にやはるらんみし面影につれてきにけり」  
 ⑬ 「うちなげきまどろめば又みにそひておもかげのみぞはなれざりける」  
 ⑭ 「この世には人の形見の面影をわが身に添へてあはれとや見む」  
 ⑮ 「見馴れにしその面影を身に添へてあはれ月日を過ぐしけるかな」  
 ⑯ 「あふことはうつつにそへる面影とはかなきよはの夢となりけり」  
 ⑰ 「おもかげは昔ながらに身にそひて我のみとしのおいにけるかな」  
 ⑱ 「はやくみしそのおもかげのはなれねばきみゆゑみをもすてぬとをしれ」  
 ⑲ 「ますかがみみしおもかげの身にそひてころはきみにうつりぬるかな」  
 ⑲ 「しらくものちへにへだつるやまちにも猶はなれぬはきみがおもかげ」  
 ⑳ 「はなをみる心はよそにへだたりて身につきたるは君がおもかげ」  
 ㉑ 「なき跡の面影をのみにそへてさこそは人の恋しかるらめ」
- （『源三位頼政集』四八〇）  
 （『林下集』恋・二〇一）  
 （『とりかへばや物語』巻二・二二 女中納言）  
 （『とりかへばや物語』巻四・六五 大将（男内侍））  
 （『月詣和歌集』恋・三六八 恵円法師）  
 （『月詣和歌集』恋・五八五 俊恵法師）  
 （『師光集』七〇）  
 （『寂然法師集』恋・七一）  
 （『公衡百首』旅恋・九二）  
 （『山家集』恋・五九八）  
 （『西行法師歌集』雑・六三五）

⑫歌「面影につれてきにけり」、㉑歌「（面影）身につきたる」といった新しい表現を見ることが出来るが、「面影はなれぬ」「面影身にそふ」は、多くの例歌を見ることが出来、表現として一般化したと言える。ただ、こうした表現も『源氏物語』に「面影は身をも離れず山ざくら心のかざりとめて来しかど」「若紫」光源氏）の例歌がある。伝統的な和歌表現においては、「面影」は「面影に見ゆ」と表現するという観念があり、「面影はなれぬ」という表現が一般化するまでには時間がかかったと考えられる。

## 五

「面影とめよ」の例歌は、勅撰集においては、八首あり、初出は『新勅撰』である。

- ① 「ちぎりしにかはるうらみもわすられてそのおもかげは猶とまるかな」  
 ② 「あかずみるはなのこのまをもるつきにおもかげとめよくものうへ人」  
 ③ 「月だにも面かげとめよ衣衣の袖のわかれをしたふ涙に」  
 ④ 「きぬぎぬの袖の涙をかたみにておもかげとむる有明の月」  
 ⑤ 「みずもあらずさめにし夢のわかれよりあやなくとむる人の面かげ」  
 ⑥ 「ゆきうつるところのおもかげをころにとむるたびのみちかな」  
 ⑦ 「おもかげのとまるなごりよそれだにも人のゆるせるかたみならぬを」  
 ⑧ 「くれもよしなかなの月のおもかげもとめてみるべきたもとならねば」
- （『新勅撰』恋・九二三 左近中将公衡）  
 （『続古今』春・一三二 入道前太政大臣）  
 （『続千載』恋・一三五八 藤原宗行）  
 （『続千載』恋・一三六二 法皇御製）  
 （『続千載』恋・一五二九 今出川近衛）  
 （『風雅』旅・九三九 祭主定忠）  
 （『風雅』恋・一三九三 伏見院御製）  
 （『風雅』雑・一八五二 欣子内親王）

雅経歌、および俊成卿女歌「面影のかすめる月ぞやどりける」の影響下にある例歌である。「面影」を留めると詠じるのであるが、どこに留まるのかは



①⑤⑦歌については明確に詠じてはいない。ただ、⑥歌は「おもかげをこころにとむる」とあり、「面影」は「心に留める」ものと解している。また、②歌「つきにおもかげとめよ」という。「月」に「面影」が留まるのである。一首は、飽かず眺める月に、「花の面影」を留めて欲しい、そうすれば、花が散った後も飽きることなく、花を見ることができるとい意である。「月」に「面影」を留めるとは、月に「面影」が映っている状態と考えられる。「面影を映す月」が「涙に宿る」と詠じるのが、③④⑧歌である。この三首は俊成卿女歌の影響である。

雅経歌の影響を受けた勅撰歌において、「面影」の留まる所は、「心」であり、「月」である。俊成卿女歌の影響に依る「面影宿す月が涙に映じる」ことはあつても、「面影」が直接「涙」に浮かぶと詠む歌はないと言える。

次に、雅経歌に先行する例歌を見るが、例歌は少ない。

- ① 「おも影にとまるはかひもなかりけり梢にちらぬ紅葉ともがな」 (『右大臣家歌合』(治承三年) 紅葉・十三番右 基輔朝臣)
- ② 「うきにのみならひにければおもかげのきてはとまらぬけしきなるかな」 (『月詣和歌集』恋・五八八 大輔)
- ③ 「ちぎりにしかはるうらみもわすられてそのおもかげはなほとまるかな」 (『公衡集』八二)
- ④ 「ちりぬれどかたみは久しむめの花とまる面かげ袖のうつりが」 (『内裏百番歌合』健保四年・三番右 越前)
- ⑤ 「ためしなきかかるわかれになほとまるおもかげばかり身にそふぞうき」 (『建礼門院右京大夫集』二二五)

⑤歌の詠作年次は、雅経歌に先行すると思われるが、『新勅撰集』撰進の折りに世に出たと思われることから、雅経歌に影響を与えた先行歌とすることには、躊躇されるが、同時代に詠作されていた、表現の有り様を見ることは出来ると思う。「面影」を身に添うと詠じているのである。①②③④歌ともに、「面影」の留まる場所は直接には表現されていない。⑤歌や、これまでの考察をもとにすると、心や、身を離れず、身に添う状態と考えられる。

次に、「面影」と「涙」との関係を見る。前掲、俊頼歌「ことごとになつ面影は人しれずおつる涙のかどでなりけり」(『散木奇歌集』悲歎・八三四)は、詞書「もとの三条にかへりつきて、見まらせばつねにゐさせ給ひし所にもみえさせ給はざりしかば、あさましきに」とあるが、逢いたい人には逢えず、ことあるごとに浮かぶ面影は、人知れず流す涙の門出であるという。「面影」は「涙」を流すきっかけとして捉えられている。その他の同時代の例歌をあげる。

- ① 「せたの里橋の馬ふみくちめおほみそこの涙ぞおもかげにたつ」 (『散木奇歌集』恋・一〇〇八)
- ② 「みし人のねくたれがみの面影に涙かきやるさ夜の手枕」 (『後京極殿御自歌合』七十番 左 夜恋)
- ③ 「おもかげにゆくへをとへばあぢきなくしらぬ涙のこたへがほなる」 (『千五百番歌合』恋・千百九十一番 左 季能卿)
- ④ 「さきだしおもかげのみぞ有あけのつきせぬものは涙なりけり」 (『明日香井和歌集』雑・一六一五)
- ⑤ 「ひとりさへ涙すすむるたよりかな別れしほどの袖のおも影」 (『拾玉集』「楚忽第一百首」別・七九四)
- ⑥ 「月みればむかしの秋の面かげにさしもつきせぬ我が涙かな」 (『壬二集』秋・二四六一)

①歌は、詞書に「人のなくなくらみければかへりてつかはしける」とある。関根慶子氏が、「つれないと恨んだ女に、瀬田の橋の朽目からみえる河底にあなたの姿が浮かんで恋しいことだと詠む(8)」と考察されたように、この涙は詠作者の涙ではなく、相手の涙である。相手の女の涙を見て、女の面影を思うと詠じる。詠作者の流した涙に面影が立つというのではない。②歌は、「かつて契りを交わした人の寝乱れた髪の面影を思い、流した涙をかき払う。

独り寝の夜、自ら手枕をしている私は（9）」と口語訳されている。「面影」により、「涙」を流すのである。⑥歌も同様に、「面影」のため、涙は尽きることはない」と詠じる。「涙」に「面影」が宿っているのではない。「面影を涙の門出」という俊頼歌に近い発想である。

③歌は、判詞に「心をかしく侍り」とあり、面影に行方を問うという着想、さらに、行方を知らない涙が答えそうにしているという一首の着想が評価されている。「面影」と「涙」との間には、俊頼歌のような関係は表現上、見えないが、両者の密接な関係は明らかであり、「涙」に「面影」は宿っていない。④歌は、詞書に「九日、つひにかくれ侍りにければ」とあり、先立つた人を悼む、哀傷の歌であることが分かる。中川英子氏は「先に亡くなった面影だけ。有明を見ていると尽きないものは涙であることよ（10）」と口語訳されている。先立つた人の面影ばかりが浮かび、有明の月がはかなさを思わせ、命は尽きても尽きることのないのは涙であると詠じている。面影のかかる月が、涙に映るとは詠じていないと思われる。

⑤歌は、「袖の面影」に対して、山本一氏は「一人でいる時に思い出してさえ、恋人と別れた時の、涙で濡れそぼった袖のイメージ（11）」と注釈されている。「別れしほどの袖のおも影」は、別れた時に流した袖の涙に面影が宿するというのではない。ただ、一首は、一人の時も涙を流すが、さらにその上、別れた時の濡れそぼった袖の面影が浮かぶことにより、ますます涙が出るという意ではないだろうか。「面影」が「涙」の「たより」となるという点に、「面影は涙の門出」と詠む俊頼歌の発想に近いものがあると思う。このように、「面影」が、直接「涙」に浮かぶと詠む歌はない（12）。

## 六

「面影」が「涙」に浮かぶといった先行歌がなかったからといって、雅経歌の「面影とめよ」の「面影」が「涙に留まれ」と詠じてはいないと断定はできないが、伝統を重んじる和歌にあつては、そう理解するのが一般的であると思われる。これまでの考察から、「面影」は目に見え、心に思われるという発想から、身に添い、身から離れないという発想への緩やかな流れを見ることが出来た。この雅経歌もこの流れの中で見るべきである。『狭衣物語』に次の歌がある。

「涙川流るる跡はそれながらしがらみとむる面影ぞなき」

（『狭衣物語』六八 狭衣）

例歌は「面影ぞなき」と「面影」と詠じてはいるが、飛鳥井の女君の亡骸の面影を表わしている（13）。狭衣の中將が飛鳥井の女君の入水を聞き、柵に留まっているだろう亡骸が今も見つからないことを歎き詠じた歌である。上句「涙川流るる跡はそれながら」は、飛鳥井の女君を思つて流した涙の跡はあることをいう。それにも拘らず、下句「しがらみとむる面影ぞなき」と飛鳥井の女君の面影はないという。涙はあるのに、面影はないという、上句と下句を対照させた歌いぶりである。上句と下句とは逆接的關係である。

雅経歌の上句「面影とめよ」は、『狭衣物語』歌、下句の「面影ぞなき」を受けて、「面影よ、留まれ」と詠じたと考えられる。また、雅経歌、下句「袖にせきもる」は、『狭衣物語』歌の「しがらみ」を捉えたものである。さらに、雅経歌、結句「波のかよひぢ」は、『狭衣物語』上句「涙川流るる跡はそれながら」に対応している。雅経歌は、『狭衣物語』歌の本歌取りとも考えられる。狭衣の中將の、死んでしまった飛鳥井の女君への思いを、背景に置いて、雅経歌を読むと理解しやすいように思われる。もう逢うことのない人の面影を、我が身に留めよ。清見が関の番人ではないが、清見湯の波を守っているように、わが袖も番人として、流れる涙を留めている。そのように、もう逢うことのない人の面影を我が身に添わせよという意なのである。下句で、袖に涙は留まっている、そのように、「見し人の面影よ、留まれ」と上句で詠じた歌なのである。

『万葉』(二六四二) 歌は「さどほみこひわびにけりまそかがみおもかげさらずいめにみえこそ」であった。下句「おもかげさらずいめにみえこそ」は、伊藤博氏は「せめて、面影は消えることなく、いつも夢に見えて下さい(14)」と口語訳された。面影は消えることなくというのは、「面影とめよ」に近い発想がある。これまで見たように、面影は離れることなく、身に添うと詠じており、消え行く面影を捉えているのではなかった。『八代集抄』においては、「倂」といふ物は、とまらざる物也(15)」と註しているが、「面影」の例歌は恋しいと詠じ、昔と変わらぬと詠じ、もう逢えないからといって、薄れ行く面影を詠じる歌はない(16)。雅経歌も、消え行く面影を恐れて「面影とめよ」と詠じたのではなく、いつまでも我が身に留まって欲しいという願いから詠じたと考えられる。「面影とめよ」とは、関守に命じたのではなく、我と我が心に命じたのである。

## 註

- (1) 石田吉貞氏著『新古今和歌集全註解』(有精堂出版・昭和三五年刊) 五六八頁。
  - (2) 窪田空穂氏著『完本 新古今和歌集』中巻(東京堂出版・昭和三九年刊) 四七二頁。
  - (3) 久保田淳氏著『新古今和歌集全評釈』第六巻(講談社・昭和五二年刊) 二二〇頁。
  - (4) 鹽井正男氏は「おもかげとめよ」を「面影を我が涙にとめ置きて」と語釈されている。『新古今和歌集詳解』明治書院大正一四年刊) 九七五頁。
  - (5) 村田理穂氏は「『万葉集』に於ては『面影に見ゆ』『面影にして見ゆ』『面影に思ほゆ』等のように、その殆どが「面影に+動詞」という決まったパターンの許に用いられている」(『『面影』の系譜―万葉から新古今まで―』『国語国文学研究』第二十一号・昭和六一年刊) と指摘された。
  - (6) 中野方子氏は「貫之は、うら若き未亡人李氏の夢に現れる閑雅な男という中国文学の話型をもとに、く男なき家に住む女と、夕暮れ時になると、彼女の眼前に現れる見知らぬ美しい男の面影を一首のなかに歌い込めた」と考察される。〔「面影絶えぬ玉かづらかな」『貫之集』五四三番歌と『朝野僉載』「鄧廉妻」の夢―』『立正大 國語國文』第51号・昭和五三年刊〕
  - (7) このような「そふ」という表現について、村田理穂子氏は「身にまとわりつく気配のようなものとしての印象が強い」と考察された。〔続『面影』の系譜―万葉から新古今時代まで―』『国語国文学研究』第二十三号・昭和六二年刊〕。
  - (8) 関根慶子氏・古屋孝子氏著『散木奇歌集注篇』下巻(風間書房・平成一年) 一六八頁。
  - (9) 石川一氏・広島和歌文学研究会編『後京極殿御自歌合・慈鎮和尚自歌合全註解』(勉誠出版・二〇一一年刊) 一三二頁。
  - (10) 中川英子氏著『雅経明日香井和歌集全釈』(溪声出版・平成二二年刊) 四六三頁。
  - (11) 石川一・山本一著『和歌文学大系59拾玉集』(上)(明治書院・平成二三年刊) 九八頁。
  - (12) ただし、『とはずがたり』に次の三首がある。
    - ①「帰るさの袂は知らず面影は袖の涙に有明の空」(巻二・二二 作者)
    - ②「つらしとて別れしままの面影をあらぬ涙にまた宿しつる」(巻三・五一 作者)
    - ③「わが袖の涙に宿る有明の明けても同じ面影もがな」(巻三・五六 作者)
- ①歌は「面影は袖の涙に」とあり、後朝の別れをした雪の曙の面影が、二条が流した袖の涙に宿ると詠む。②歌は、「面影をあらぬ涙に宿し」とあり、有明の月の面影が、思いも掛けなかった涙に宿ると詠む。③歌は「袖の涙に宿るく面影もがな」とあり、二条の流した袖の涙に、夜が明けても高僧、有明の月の面影が宿って欲しいと詠む。願望としての表現であるが、後世、涙に面影が宿るとする歌がある。

(13) 日本古典文学全集『狭衣物語』（小学館・一九九九年刊・二五四頁）では、「涙川の流れた跡はそのままなのに、しがらみに懸け留まった亡骸の面影さえ見えないことだ」と口語訳する。

(14) 伊藤博氏著『万葉集釋注』六（集英社・一九九七年刊）二七八頁。

(15) 山岸徳平氏編『八代集全註』第二卷（有精堂・昭和三五年刊）七一五頁。

(16) ただし、「見し人」は次の例歌のように、つれないものである。

「花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ」（『後撰』春・一〇二 もとよしのみこ）

「またざりし秋はきぬれどみし人の心はよそになりもゆくかな」（『後撰』恋・八四一 なかきがむすめ）

「みしひとにわすられてふるそでにこそ身をしるあめはいつもをやまね」（『後拾遺』恋・七〇三 和泉式部）

【付記】 テキストは、『新編 国歌大観』（CD-ROM 版 Ver.2 角川書店）を用いた。